

ふるさと再発見！

vol. 8

ほろほろわかやま

HOUBO
WAKAYAMA

FREE

巻頭
特集

黒潮を悠々と泳ぐ 海の王様「クエ」

●紀州の歴史・文化
常世国から紀州へ

非時香菓と有田みかん

●散策

貴志川線でゆく

西国三社参り

●施設紹介

高野山霊宝館

寶護り、伝え、そして未来へ

●シリーズ道の駅

運転疲れは美肌の湯で癒す

椿はなの湯

黒潮を悠々と泳ぐ 海の王様「クエ」

その特徴的な縞模様から「九絵」と名付けられたともいわれる巨大魚「クエ」。

本州中部以南に生息し、関東では「モロコ」九州地方では「アラ」とも呼ばれ、冬を旬とする食材として鍋料理などで有名だ。

特に和歌山近海で獲れる天然モノは、黒潮の影響で味もよく高級品とされている。今回は、和歌山を代表する冬の食材「クエ」に注目する。



「天然クエ」の漁場、

日高地域

紀伊半島の中ほどにある日高地域。県立自然公園に指定されるほど風光明媚な海岸線は、浜部と岩礁部からなるリアス式海岸で、沖合いは良好な漁場となっている。

その沖合いの岩礁域に今回の主役である「クエ」は生息している。

クエは、スズキ目ハタ科の魚で大きなものは1mを超え

る巨大魚になる。体全体にあ

る縞模様と、分厚い唇にびっ

しりと歯が並んだ大きな口が

特徴。水深50mまでの岩礁域

に生息し、群れをなさず、昼

間は岩陰や洞窟でひっそりと

している。夜に海底を泳ぎ回っ

て、その大きな口で魚類やイ

カなどを丸飲みにしてしまう

肉食系だ。

クエをモチーフにしたモニュメント。日高町のシンボルにもなっている。



見た目はコワイが

食べれば絶品

地域文化に息づくクエ

クエの漁期はおもに冬場。地元の漁師たちは釣り竿を使わない、手釣りで漁を行なう一本釣りだ。生きたアオリイカを大針に刺して海へ投げ込み、腕力だけでこの巨大魚を釣り上げる。

漁業の盛んな日高町阿尾地区の白鬚神社には、奇祭として知られる「クエ祭」（県指定無形民俗文化財）がある。豊漁を祈願して、秋に行なわれる勇壮なケンカ祭りだ。

古式ゆかしい

「クエ御輿」づくり

釣るのが難しく、水揚げ量が極端に少ない。ベテランの漁師が3日漁に出て1匹獲れるか獲れないかと言われる「幻の魚」と呼ばれるゆえんだ。

祭当日には、珍しい御輿みこしが作られる。体長1.5m

迫力あるグロテスクな見かけに似合わず、その身は繊細な白身に脂がのり上品で深みのある味わいで、ゼラチン質が含まれた皮やアラなどは絶品である。

もの大きなクエを丸太にくり付けた「クエ御輿」と、御神酒おみきの入った四斗樽をくくり付けた「樽御輿」である。

地元では「一度クエを食うたら他の魚は食えん」と言われるほどその味は食べる人を虜にしている。

クエ御輿に使われるクエは、古式にしたがってお神酒で身を清めた神社の宮司と当屋衆とうやしゅうたちによって調理される。

宮司が左手に持った包丁で、クエの腹に第一刀を入れることから始まり身を切り出す。内蔵と身は神前供物用に



塩漬けにされ、骨と皮は神輿用として2週間ほど塩漬けにされ天日に干される。

そして祭当日にわらを詰め込み、畳針で縫い合わせてクエの原形に復元する。その後クエの口元に太いしめ縄を通して、4mの丸太にくくりつけられて完成となる。

せめぎ合う

海に生きる男たち

神置きの当屋衆宅から神社まで「御渡り」の奉納行列の後ろに御輿がついて練り歩き、神社に近づくにつれて御輿の奪い合いが始まる。この祭の最大の見ものである「クエ押し」だ。クエ御輿を奉納して一刻も早く任務から解放されたい当屋衆と、それを阻止して祭を長びかせたい若衆が勇ましく声を響かせ競り合うと、お祭ムードが一気に盛り上がる。

鳥居下の道路や石段上で激しい奪い合いが繰り返され、

海に投げ込まれる者も出る。クエ御輿も海に放り込まれるのだ。

この祭の歴史は江戸時代から続き、地元住民とクエとの深い関わりを物語っている。海と共にある地域の人々にとって、クエはなくてはならない存在感をもつ魚となっているのだ。

奇祭「クエ祭」のこれから

由緒あるクエ祭は、当屋制度・上座制度、また若者が共同して関わる若衆制度など古くからのしきたりがあり、神官に加え僧侶も参加する神仏混交など民俗学研究的にも注目され保存・伝承が求められている。

しかし、漁業の後継者不足や高齢化、また材料調達の難しさなど課題も多く、地域の人々が一丸となって継承してきたクエ祭りであるが、これからは地域を越えた広範な支援が必要となっているのだ。



幻の高級魚を 身近にした「養殖クエ」

「天然クエ」の日高地域に
対して、「養殖クエ」の発祥
の地が白浜町だ。

養殖クエは、同町にある近
畿大学水産研究所が「クエを
名物にしたい」という地元
の要望を受け、昭和50年代後半

（80年代はじめ）から研究を
始めた。昭和63年（1988）

に最初の産卵と人工孵化に成
功するものの、稚魚が安定的
に生産できるまでに数年を要
した。

苦勞の末、初出荷が平成19
年（2007）と約20年越し
の地域貢献であった。

同研究所が養殖クエの生産
技術を確立したことで、安定
供給が可能になり、現在では
年間を通じて約1万本が出荷
されている。

最初はみんなメス？

研究開始当初、クエの生態
に関して多くの問題点にぶつ
かった。クエは、最初すべて
メスで集団の中の大きな魚が
性転換してオスとなる性質を
持ったため「オスの親魚」の確
保や、大きな口をあける成魚
からは想像できないほど小さ
な口の仔魚に合う「餌用プラ
ンクトンの培養」に苦勞した。



また、成長の遅さも課題と
なった。重さ3kgになるに
は和歌山では約5年かかる
が、成長スピードが水温に左
右されることを突き止めた。
和歌山で6カ月ほど育てた稚
魚を温暖な奄美大島に移すと
約3年で同様の大きさに成長
する。養殖期間の短縮を成功
させたのだ。

「海を耕す漁業」が 地域振興に寄与

一般的に天然クエは、重さ
20〜30kgで大きいもので体長
1m・重さ30kgを越す。しか



【取材協力】
●元日高町阿尾区長 阿尾区クエ祭保存会長 上出貞和氏
●近畿大学 水産研究所

し、養殖クエは大きさが3〜
5kgと小ぶりなため、調理し
やすく、必要な量を使いきる
ことができる、宿泊施設や
飲食店でも好評だ。
天然モノに遜色ない味で半
値程度であるといっても、ま
だ生産量が限られているため
商品価値は高く、地元優先で
供給されている。

「海を耕す」という理念の
下、同研究所が取り組む新し
い漁業「養殖」が、「地域の名
物」を求める地元の思いとつ
ながった。こうして生まれた
「養殖クエ」が、今後、地域活
性化に果たす役割は大きい。

常世国から紀州へ

非時香菓と有田みかん

秋から冬にかけてあたり一面にみかんが実る有田地方の山々は、黄金に色づく。温暖な気候と日当たりのよい傾斜地を有するこの地域は、全国でも最高級の品質を誇る「有田みかん」の産地だ。しかし、そのみかんはどこから来たのか、みかん栽培がさかんになったのはいつごろか……。みかんのルーツを探ってみた。

みかんの祖 田道間守公

たぢまもり



奈良時代、第11代垂仁天皇の命を受けた田道間守公は不老長寿の食べ物を求めて常世国（中国）に渡った。苦労の末に非時香菓という「橘」を持ち帰るが、時すでに遅く天皇は崩御されていた。田道間守公は深く悲しみ、その陵に橘を捧げたのちに息絶えたという。その橘が植えられた場所が、今の和歌山県下津町橋本である。

「田道間守公の生誕地（現在の兵庫豊岡町）は雪も降

り、橘は育たないということ、お付きの方が温暖なところに行つたのだらうと推測されています。」そう語るのは田道間守公をお祀りしている橋本神社宮司の前山和範氏だ。

昔は、果物がお菓子のようなものだった。その果物の由来となる橘を中国から持ち帰った田道間守公は「お菓子の祖神」として、今でもみかん栽培や菓子事業に携わる多くの人々から敬われている。

紀州蜜柑伝来記（みかん資料館 展示）



有田みかんの伝来 伊藤孫右衛門



「紀州蜜柑伝来記」によると、室町時代、糸我（今の有田市）の伊藤孫右衛門は役人の命を受け、肥後（今の熊本県）の八代より藩外持ち出し禁止のみかんの苗を観賞用として許可をもらい持ち帰り、自宅の畑に植えたところ、とてもおいしいみかんが実った。

その苗木を近隣の村に分けたの

有田市のみかん資料館学芸員の西岡巖氏にお話を伺った。

「記録からすると八代から伊藤孫右衛門が持ち帰り栽培を始めたという話は確かです。紀州には、大阪などの消費地が近くに多くあったため、商売として成り立った。それが、みかんの産地として広まった要因です。」

橋本神社

田道間守公が常世国から持ち帰った「非時香菓」（橘）が、橋本神社の旧社地の六本樹の丘に移植されたことが由来となっている。

「みかんの神様」をお祀りする唯一の神社で、毎年10月の第2日曜日に行っている「みかん祭り」では、豊作を祈願するみかん生産者、製菓会社などから、みかんや、みかんを形取ったおまんじゅうとケーキが奉納され、獅子舞や餅投げなども行われる。

また、春（4月の第1日曜日）には、菓子業界の繁栄を祈願する「お菓子祭り」も行われている。



橋本神社宮司 前山和範氏



境内の橘の木



みかん祭り

ほうぼ かわやま



有田川河口の中州への積み上げ



選別し、籠に詰めたみかんの帳簿をつける



みかん籠を小船に積み込む



沖合で待つ本船まで小船で運ぶ

みかん船で江戸へ 徳川頼宣候

とくがわよりのぶ



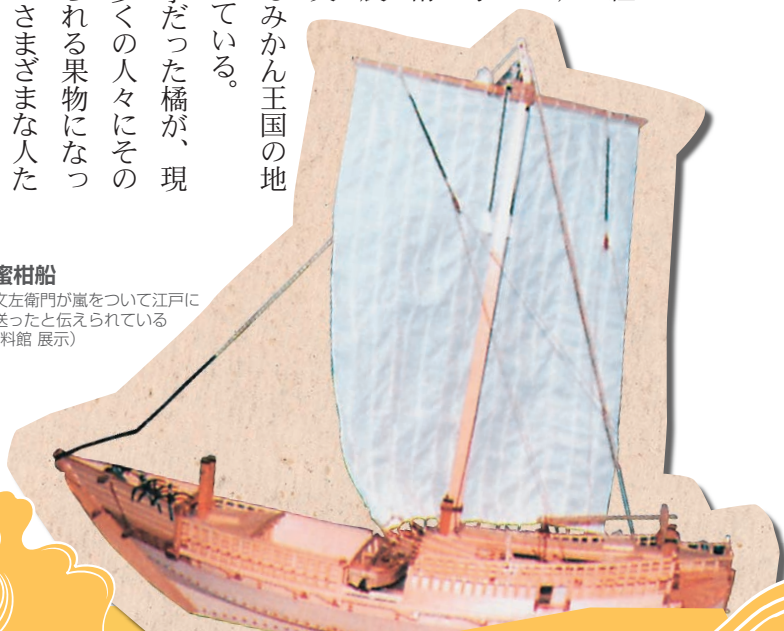
江戸時代に入り、徳川頼宣候は、山に囲まれた紀州には米の耕作地が少なく、また傾斜地がみかん栽培に向いていることから、みかん栽培を推奨・保護するとともに、「みかん方」という役所を作った。「江戸でみかんが広まったのは、頼宣候がみかんを一箇所に集め、船で大阪などに運ぶようにしたこと、その時期に堺の商人が江戸への海路を開拓

したからだ。紀州のみかんは好評で、江戸では「紀州みかん」と呼ばれた。このころのみかんは、当時の年収では段ボール箱4箱分しか買えないほどの高級なお菓子でした」(西岡氏)。子孫繁栄を第一とする武家社会では縁起が悪いとされた種無し「温州みかん」も、明治になると味の良さと食べやすさから、次第に主流になっていく。有田も温州みか

んの栽培にいち早く取り組み始め、江戸時代から培ってきた組織的な栽培技術と、みかん農家の努力が実り、現在でもみかん王国の地位を保ち続けている。貴重な菓子だった橘が、現在のように多くの人々にその恵みを与えられる果物になった背景には、さまざまな人たちの尽力があった。

きのくに 紀伊国蜜柑船

紀伊国屋文左衛門が嵐について江戸にみかんを送ったと伝えられている (みかん資料館 展示)



みかん資料館

地形がみかん栽培に適していることを示す有田地方全景の地図の展示、生産の様子を表す立体模型や映像を使って、みかんをはじめとする柑橘類について、分かりやすく紹介している。

また、江戸時代のみかん出荷の様子をあらわす立体模型や年表から、400余年の歴史にもふれることができる。



橘本神社

所在地/海安市下津町橘本125
TEL/073-494-0083

みかん資料館

所在地/有田市箕島27
(有田市文化福祉センター内)
TEL/0737-82-3221
開館時間/午前9:30~午後5:00
(入館は午後4:30まで)
休館日/毎週火曜日 年末年始
入館料/無料

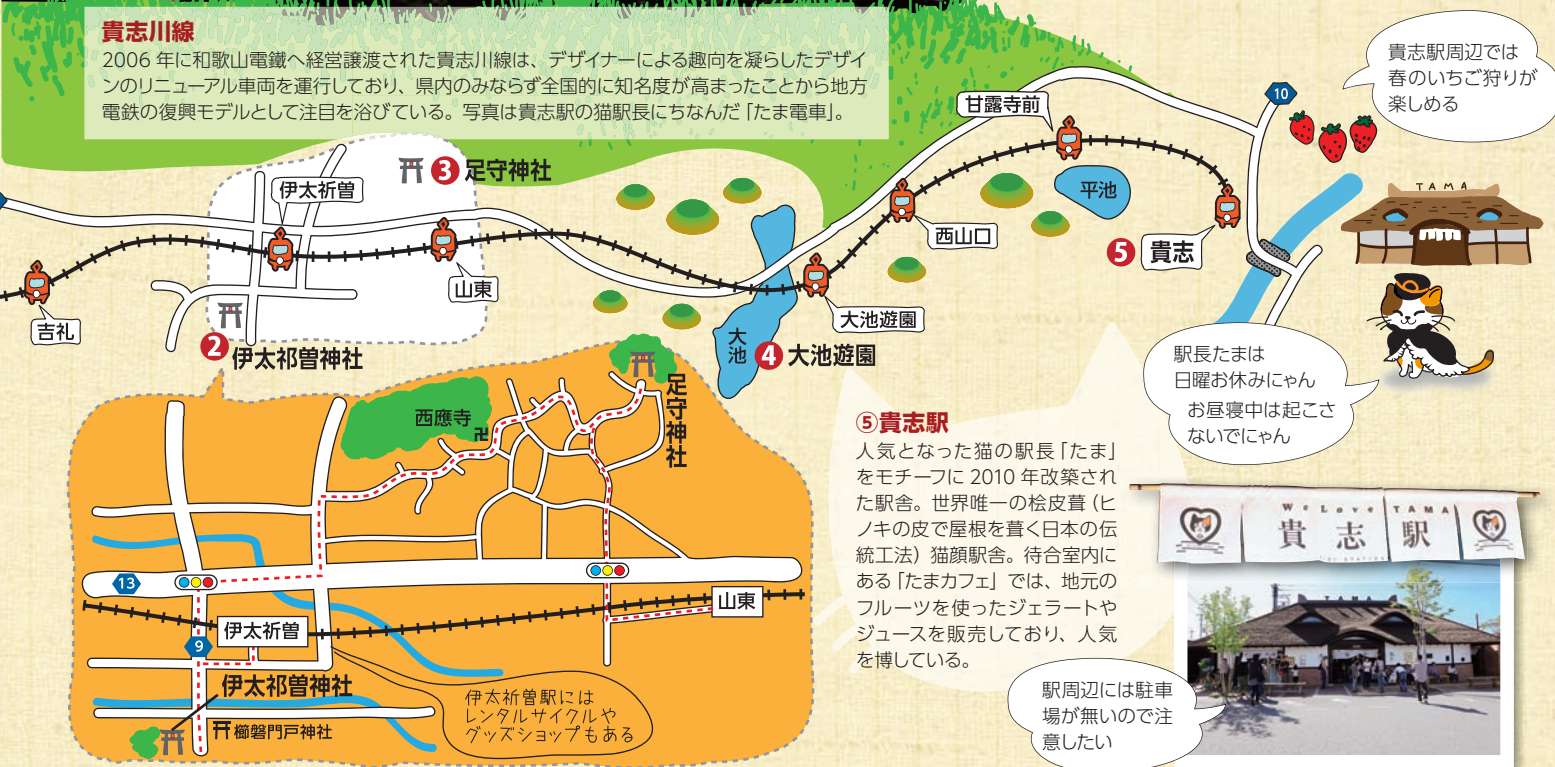
貴志川線でゆく

西国三社参り



貴志川線

2006年に和歌山電鐵へ経営譲渡された貴志川線は、デザイナーによる趣向を凝らしたデザインのリニューアル車両を運行しており、県内のみならず全国的に知名度が高まったことから地方電鉄の復興モデルとして注目を浴びている。写真は貴志駅の猫駅長にちなんだ「たま電車」。



⑤ 貴志駅

人気となった猫の駅長「たま」をモチーフに2010年改築された駅舎。世界唯一の松皮葺（ヒノキの皮で屋根を葺く日本の伝統工法）猫顔駅舎。待合室内にある「たまカフェ」では、地元のフルーツを使ったジェラートやジュースを販売しており、人気を博している。

駅周辺には駐車場が無いので注意したい

出発は朝の10時。JR和歌山駅で貴志川線に乗りたい旨を伝え、改札口を通らせてもらい、地下道から階段を登り貴志川線乗り場へとたどり着く。一日乗車券を購入して、まずは最初の目的地「竈山神社」をめざす。竈山駅を降りてすぐにある大鳥居をくぐって、徒歩10分ほどで神社に到着。豊かな木々に囲まれ、静寂に満ちた社殿は、厳かな雰囲気にも包まれていた。

次は伊太祈曽駅から徒歩5分ほどで着く「伊太祈曽神社」。池に架けられた朱色の橋を渡り、開放的な社殿へ。境内社である蛭子神社の前には、猿の頭の形をした石「お猿石」が祀られており、この石を撫でることで首より上の病に霊験あらたかであると古くより伝わっているとのこと。ここから駅には戻らず、三社参りの神社ではないものの、日本唯一の「足の神様」として知られる「足守神社」へと向かう。徒歩15分ほどの場所にあるこの神社にはたくさん

のわらじが奉納されている。往きとほぼ同じ時間をかけ、伊太祈曽駅の隣駅にある山東駅から、再び貴志川線に乗り込む。大池遊園駅で降車し、花見のスポットとしても人気の高い草木に囲まれた広場で昼食をとった。

せっかくなので、猫の駅長として全国的に有名となった「たま」に会うため、終点である貴志駅まで乗る。しばらく滞在した後、ここから折り返し日前宮駅まで戻る。

三社参りの最後となる「日前宮」は、駅から降りてすぐの場所にある。

日前宮とは日前神宮、国懸神宮と二つの神社の総称であり、毎年年始には数十万人の参拝客で賑わう。最後に、日前宮から徒歩10分ほどの場所にある、学問の神様として知られる「津秦天満宮」にも詣でて帰路についた。

この三社参りコースは、休憩・滞在時間も含めておよそ5時間だった。



二社あわせて 日前宮

⑥日前宮

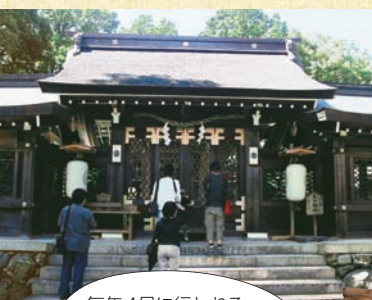
日前宮・國懸神宮の二社を一般に日前宮と呼ぶ。歴史は非常に古く、「日本書紀」に三種の神器である八咫鏡(やたのかがみ)に先立って鑄造された鏡である日像鏡(ひがたのかがみ)・日矛鏡(ひぼこのかがみ)が祀られていると記されており、それぞれ日前神宮、國懸神宮の御神体とされている。紀伊國一之宮として天照大御神を奉祀し、家内安全の御利益を賜るとされている。



皇室御崇敬の大社

①龜山神社

御祭神の彦五瀬命(ひこいつせのみこと)は神武天皇の兄であり、大和平定の途中、戦傷を負い龜山に葬られたと伝えられている。大殿背後にその陵墓があり、国家安泰・世界の平和と発展を守っているといわれている。「紀伊統風土記」によると墓が作られてまもなく、その側に社が祀られたと記されている。天正13年(1585年)、羽柴(豊田)秀吉の紀州根来衆攻めにより社殿を始め宝物・古文書などを焼失したが、寛文9年(1669年)、和歌山城主である徳川頼宣により社殿が再建された。



毎年4月に行われる「木祭り」において奉納された「辰」。チェーンソーのみを用いて、丸太から彫刻されている。

日本の国に木種をまいたといわれる神様

②伊太祁曾神社

「日本書紀」によると、日本に木種をまき緑豊かな国に造り上げたと記される五十猛命(いたけるのみこと)が祭神として祀られている。また「古事記」には五十猛命が厄災に遭われた大國主神を木の国で助けたとあり、「いのち神」「厄除け・病気平癒の神」として信仰を集めている。その神話にちなみ、御神木である杉の木の一部である穴を潜り抜けることで災難を除けられるという「木のぼくぐり」を体験することができる。



ユニークなデザインで幅広い年代層に人気のリニューアル列車。

時刻表の乗り換えチェックで、乗車全制覇にチャレンジ!



おもちゃ電車



たま電車



いちご電車



⑦津秦天満宮

菅原道真公を主祭神としている。「学問の神様」として崇敬され、社殿には千年以上の歴史をもつ楠の太木が神木として存在する。幕末期、紀州藩校「学習館」の校長の妻であった川合小梅が描いた三十六歌仙の絵も納められている。



④大池遊園

周囲約4kmの池を中心にして、四季の自然に囲まれた公園。古くから桜の名所として知られ、春には多くの花見客が訪れる。



全国的にも 珍しい足の神様

③足守神社

大池遊園の難工事で足を痛める者が多く出たため、高野山の覚鑊(かくぼん)上人が建立したといわれ、足を痛めた人だけでなく、スポーツ選手も多く訪れるという。



寶

たから

護り、伝え、そして未来へ

高野山 靈宝館

標高約 850m— 8つの峰々に囲まれている聖地高野山
高野山に伝えられている貴重な仏画・仏像などの
多くの名宝を、90年間、護り伝えてきた高野山靈宝館を訪ねた

画／第一完成予想図

靈宝館の歴史

高野山靈宝館は、大正10年（1921）、今から90年前に開館した。明治21年（1888）の高野山大火災をきっかけに、山内でも「宝物館を造ろう」という声の高まりが、全国的に博物館が建設され始めた時期と重なって、宝物館建設構想の幕が上がった。「日本の鉄道王」といわれた根津嘉一郎氏を筆頭に、有志者の寄付や金剛峯寺の尽力によって本館は建てられた。

その後、昭和36年（1961）には大宝蔵が増設され、山内の国指定有形文化財の大半が収蔵されるようになった。現在では、国宝、重要文化財、和歌山県指定文化財、重要美術品などを含む約2万8千点余りを収蔵するほか、5万点以上の未指定品を収蔵している。

同館の所蔵品の90%以上は、高野山内の寺院の宝物を預かったものだ。預かり品を保管しながら展示することで成り立っている博物館は、全国的にも珍しい。



大正8年(1919)上棟式の様子

「博物館では振り返ることもある」

拝観ルート通りに見学していくと、紫雲殿から南廊へ出る向いの隅廊に、千手観音坐像が見える。

千手観音坐像を360度くると堪能し、南廊へ抜ける前に見返ると、中央に千手観音坐像、左右に毘沙門天と不動明王を配した観音菩薩三尊形式になっていた。これは、天台宗の安置形式である。

弘法大師空海と伝教大師最澄が袂を分かって以来、交流がなかったというイメージがあるが、事実とは異なり、実際は僧侶同士の交流が深かったという。天台宗の美術、それらを象徴する三尊形式を高野山で観る感慨深さ。ぜひとも一度振り返っていただきたい。



高野山靈宝館(財高野山文化財保存会)

休館日 年末年始のみ

開館時間 5月～10月 8:30▶17:30 11月～4月 8:30▶17:00

拝観料 一般600円/高校・大学生350円/小・中学生250円

〒648-0211 和歌山県伊都郡高野町高野山306

TEL (0736) 56-2029/FAX (0736) 56-2806 <http://www.reihokan.or.jp/>

※壇上伽藍、金剛峯寺、大師教会、徳川家霊台との割引共通券もあります。
※展示収蔵品は、随時入れ替えられています。





新館（新収蔵庫）

昭和 59 年（1984）に開館した新館には、第 1 室から第 3 室まであり、第 1 室は主に常設展示となっている。



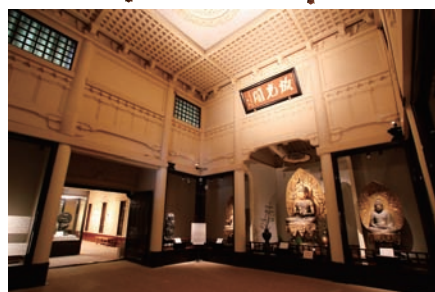
紫雲殿扉の装飾



紫雲殿天井

本館「紫雲殿」

霊宝館の中心となる「紫雲殿」は、寺院では正堂にあたる。扉や天井には創作した模様があり、一見洋風に見えるが、三鈷杵の先など、仏教に関するものが描かれている。



放光閣扉の装飾



放光閣天井

本館「放光閣」

お堂のような形の「放光閣」は、仏が光明を放つという意味から名付けられた。天井中央には、巴紋（ともえもん）を中心に、蓮弁と唐草紋で囲まれたレリーフがあり、寺堂における天蓋（てんがい）を表している。

最古の木造博物館

当初の完成予想図では、京都宇治の平等院鳳凰堂を同館のモデルとしていた。しかし、第一次世界大戦等の世情の影響を受け、規模の縮小が避けられなくなった。そんな経緯を、今も残る当時の設計資料が伝えてくれる。

大江新太郎氏が中心となって設計された同館は、木造博物館としては日本最古の建築物で、平成 10 年には登録文化財となった。奈良、京都、東京等の国立博物館の多くが、洋風造りを主流としている中



書跡などを展示しているケース

ガラスなどは張り替えられているが、木製の部分は 90 年前と変わらない。



紫雲殿と放光閣を結ぶ南廊内部

高低差がもたらすなだらかな天井が特徴的。リズムよく並んだ垂木と、優美な曲線が織りなす姿は必見だ。

で、同館は珍しく「和風」造りだ。しかし、それが展示物と見事に調和している。建物、紫雲殿を中心に放光閣・玄関の三つの主要部が

らなる。南廊と西廊の間に設けられた櫓が、紫雲殿と放光閣の調和を図っている。一見すると木造建築に見えないのは、八角形の柱が円柱になるまで漆喰を施しているからだ。年中多湿な高野山の湿気と火の気から宝物を護っている。

紫雲殿の天井中央は折上組入格天井である。中央には、巨大壁面が設けられ、4

メートル四方にも及ぶ大きな曼荼羅を展示できる。

これらの設備からも、設計の段階から「何を」「どこに」展示するのか、計算尽くであったことがうかがえる。同館の設立に関わった人々の熱い思いは、資金不足による規模の縮小などの困難に直面しながらも、手を抜くことなく、豪華で荘厳な佇まいを堅持した。その思いは、

これからの設備からも、設計の段階から「何を」「どこに」展示するのか、計算尽くであったことがうかがえる。同館の設立に関わった人々の熱い思いは、資金不足による規模の縮小などの困難に直面しながらも、手を抜くことなく、豪華で荘厳な佇まいを堅持した。その思いは、

2011 年 9 月、館内に展示していた木像の左足首の破損がきっかけとなり、内視鏡で調査をしたところ、鎌倉時代を代表する仏師・快慶の作と確認された。執金剛神立像は深沙大将立像（じんじやたいしやうりゅうざう）と一対で作られたとされ、信仰上でも大きな発見となった。（現在は修理中で、展示はしていない。深沙大将立像のみ展示中。）



和歌山県の道の駅を巡る

シリーズ道の駅④

運転疲れは美肌の湯で癒す

— 椿はなの湯 —

「椿はなの湯」は、平成10年4月に県内道の駅第21号としてオープンした。

高速道路の南紀地方延長計画の影響で、衰退も心配される椿温泉郷の中で、「椿はなの湯」は地域活性化の中心として、多くの観光客の「憩いの場」となることをめざしている。

風呂は、男湯・女湯・家族風呂の3種類がある。男湯・女湯には約41℃の加熱温泉大浴槽と約32℃の源泉かけ流しの横風呂があり、交互に入浴することで、美容・健康に一層の効果があるそうだ。屋外には無料の足湯もあり、ドライバーのリフレッシュの場としても親しまれている。

また、日曜・祝日に行われている「椿おばやんの会」のつばき油・実演販売は、原料が底をつくほどの人気商品となっている。

台風12号被害の早期復興をめざして、がんばる地元の人々を応援する意味でも、ぜひ訪れて欲しい道の駅だ。

台風12号被害の早期復興をめざして、がんばる地元の人々を応援する意味でも、ぜひ訪れて欲しい道の駅だ。



家族風呂 (50 分以内 2000 円) もある
椿はなの湯の泉質は、単純硫黄温泉で神経痛、筋肉痛、関節痛などに効能があり、万病に効果があるといわれている。



店内土産物売り場



椿はなの湯

<http://www.tsubaki-hananoyu.com>

【所在地】和歌山県西牟婁郡白浜町椿1058-1

【休館日】毎週火曜日(祝日と重なった場合は翌平日)

【営業時間】9:00~21:00(11月~2月は20:00まで)

公衆浴場: 12:00~21:00(11月~2月は20:00まで)

足湯: 10:00~17:00(7月~8月は19:00まで)

【一般浴場料金】大人(中学生以上)500円

小人(小学生)250円、乳幼児(小学校未就学児)無料

【お問い合わせ】TEL 0739-46-0617



編集後記

「ほうぼ」第8号をお届けします。私たちの故郷の歴史・文化を掘り下げて、本誌も4年を数えました。読者のみなさまの故郷への誇りと愛情を育むことに少しでもお役に立てたら、本誌の制作にたずさわる私たちもとても嬉しく思います。

計らずしも、今回は、クエとクエ祭(表紙から4面)、みかんと橋本神社(6、7面)、貴志川線と西国三社参り(7、8面)、高野山霊宝館(10、11面)と、ほとんどの誌面で祭りや神社仏閣との「つながり」に触れざるを得ませんでした。それくらい私たちは神々と共に歴史を刻んできたということなのでしょう。歴史、文化、郷土、そして、そこに暮らす人々、それらの「つながり」を大切に生きた、私たちの先祖の神との「つながり」を敬う暮らし方にも似ているのかもしれない。

本誌は、故郷の歴史・文化との「つながり」を感じて頂ける誌面を、これからも読者のみなさまにお届けして参ります。今後ともよろしくお願い申し上げます。

第8号編集長 岡 京子

クイズとアンケートで当たる!

クイズにお答え頂いた方の中から抽選で
「高野山ガイドブック」+「一筆箋」+「絵葉書」の高野山グッズセット

合計20名様にプレゼント!!

ハガキ
見本

- ① ご住所
- ② お名前
- ③ 年齢
- ④ 性別
- ⑤ クイズの答え
- ⑥ ほうぼVol.7の入手場所
- ⑦ 小誌のご意見・ご感想

応募要項

1次め切: 2012年2月末日(当選人数/10名様) 2次め切: 2012年4月末日(当選人数/10名様)

■ハガキ: 〒640-8464 和歌山市市小路153-1 紀ノ川ビル2F 株ウイング「ほうぼ・クイズ&プレゼント係」
■メール: houbou@w-i-n-g.jp ※応募くださいました個人情報は、プレゼントの発送及び弊社からのお知らせ以外には使用しません。

ヒント
本号のどこかに
答えが載っています。

問題 本文中、常世国とはどこでしょう?

① インド ② 中国 ③ 日本

Vol.7の答えは「③日本」でした。

官製ハガキまたはメールにて ①ご住所 ②お名前 ③年齢 ④性別 ⑤クイズの答え ⑥ほうぼVol.7の入手場所 ⑦小誌へのご意見・ご感想を必ずご記入の上、下記へふるってご応募ください。



株式会社ウイング/印刷物の企画・デザイン・製造を主体とし、出版サービスや印刷付帯サービス、さらにデジタルメディアなどの活用を視野に入れた「新しい印刷業」をめざしている企業です。

【沿革】創業 1972 年。設立 1981 年。2005 年に中央印刷株式会社から株式会社ウイングに社名変更。本社、和歌山市堀取。従業員 53 名。

「ほうぼ・わかやま」発行について

和歌山の歴史・文化を掘り起こし郷土愛を育む一助になればと、弊社が自費で年2回発行している情報誌です。また、この活動を通して、郷土と社内活性化の両立を図ることを目的としています。

詳しくはウェブで検索→ <http://w-i-n-g.jp>

ウイング 和歌山

検索

ほうぼのバックナンバーは弊社ホームページからダウンロードできます。
お問い合わせ先 ☎0120-13-6700